

パブリックスペースファニチャーの研究と提案

a2200615 今野 忠一

【研究概要】

公園や駅、道路脇のちょっとしたスペース、病院のロビーなど、パブリックスペースは私たちの身の回りに多く存在している。このようなパブリックスペースの充実、街に活気をもたらす、見知らぬ人々との交流の場やイベントなどのレクリエーションを我々にもたらすと考えられる。

パブリックスペースを構成する要素の一つに、パブリックスペースファニチャーがある。パブリックスペースファニチャーは、パブリックスペースを特徴づけたり、人々に快適さを与える上で重要な役割を持つと考えられている。

この卒業研究では会津若松合同庁舎を取り上げる。きっかけは、研究室に合同庁舎サイン計画の依頼がきたことであるが、サイン計画もパブリックスペースを構築する重要な要素の一つと考え、これらを充実させることにより空間に新たな利用目的を与え、快適な空間を提供したいと考えた。

【問題提起・目的】

会津若松合同庁舎には売店があり、お昼頃になると一般の方も含め多くの人々が来庁する。パスポートコーナーなどに用事があって来庁し、ついでに売店にも足を運ぶという人もいるが、お弁当だけを買いに売店に立ち寄りという人もいる。

この空間をパブリックスペースと考えると、いくつか問題点が見えてくる。一つは合同庁舎そのもののイメージである。合同庁舎と聞くと硬いイメージを持たれ、ほとんどの人が暗い気持ちで訪れている。多くの人が来庁しているにもかかわらず、暗い雰囲気が漂ったままであったら、これは良い空間とは言えない。二つ目は、合同庁舎の休憩スペースについてである。合同庁舎には県民ホールという来庁した方が自由に休んだり利用できる部屋があるが、売店に隣接しておらず、沢山の人が利用する売店付近には座って休めるようなベンチやイスがない。三つ目は庁舎内のサインについてである。現在の庁舎内のサインは統一されておらず、何種類かのものが混在している。また、視認性も悪く、得たい情報を的確に示したサインになっていない。

これらの問題点を踏まえ、合同庁舎のパブリックスペースに設置するベンチ、サイン計画の提案をし、合同庁舎が多くの人の憩える空間となることを目指す。

【調査・分析とサイン提案】

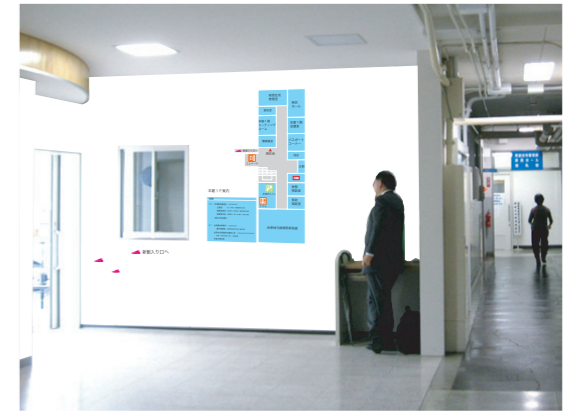
庁舎で働く方向けにアンケート調査を行った結果、26%の方が庁舎に対して暗い印象を持っていることがわかった。これは初めから私も感じていたことであった。このことから、庁舎の暗い雰囲気を取り払うというのは、提案において大きなテーマとなった。

「見ていて楽しめる」というところからデザインを考えはじめ、最終的に紙飛行機をデザインモチーフにすることにした。紙飛行機は、多くの人が子供のときに飛ばして遊んだという経験を持っており、来庁した一般の方々や子供たちが飛行機の形をしたベンチや壁に描かれた紙飛行機の絵を目にしたら喜んでくれるのではないかと思った。また、紙飛行機は「飛んで行く」ということから方向性を持っており、サイン計画において矢印の代わりに方向を示すものになるだろうと考えた。

左図のように、若松合同庁舎は4つの棟に分かれている。今回の提案は、図の①の本館部分を対象としているが、庁舎全体はこのような複数の棟に分かれ、棟から棟への移動も複雑であることが庁舎配置の特徴である。アンケート調査の結果からも、どこに何の部署があるかを明確にしてほしいという要望があり、建物配置を瞬時に理解できるサインを目指し、総合案内にはどの棟に何の部署があるかを示した立体的な配置図を設置することを提案した。この総合案内では、それぞれの棟にイメージカラーを持たせて区別し、部署や業務内容を色ごとで確認出来るようにした。それぞれのカラーは、会津木綿で使われている日本の伝統的な染め物の色から選び出した。総合案内で使用した各色は、その棟のフロア案内図のベースカラーとしても使用することにした。例えば、今回の提案の対象となった本館のカラーは青であり、本館の各フロアの案内図もこれと同じ青を使用したサインをデザインした。また、各棟にはそれぞれのイメージカラーと同色の紙飛行機を飛ばしたデザインとし、総合案内では入り口を示すサイン、フロア案内図では矢印の代わりにして部署等を案内するサインとして使用した。



▲部署名・業務内容が示された総合案内



▲総合案内と同色のベースカラーを持つフロア案内図。壁のサインは、今回の研究でデザインしたものだ。

【習作とベンチ提案】

猪苗代のベンチをデザインする際に、環境を読みとることの重要性を学んだ。その場所でのどのような行為がなされているかを調査・予測し、今回は最も人通りの多い1階売店前にベンチを設置することを提案した。

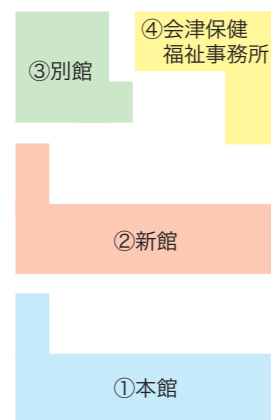
ベンチのデザインは、サインと関連性を持たせるため紙飛行機をイメージしたデザインにした。紙飛行機を連想出来るように脚、座面、背もたれは全て三角形でデザインされている。また、「紙飛行機を折っていく」という作業工程にも着目しながらデザインをスタディした。紙を折っていくように、脚、座面、背もたれが繋がり、本来の折り紙のようなイメージにより近づけたと思う。

材料は、習作と同様に木材をメインとして制作した。猪苗代のベンチは、制作には加わらずデザイン提案だけであったが、今回のベンチは制作も自分で手がけるので、デザインをしながらどのように組み立てるかを考えるのが難しかった。

今回の研究では、何度も合同庁舎の方々と打ち合わせを繰り返してきた。提案がある程度形になるとプレゼンテーションも行い、身体障がい者の方からもサインについて意見を頂くことができた。私の実施したアンケート調査の他にも、合同庁舎の方々が独自に今回のプロジェクトのアンケートを行うなど協力して頂き、合同庁舎の方々には本当にお世話になった。サインだけではなく、ベンチについても積極的に設置を検討して頂いた。多くの人と関わり、協力し合いながら取り組んできた卒業研究となった。



▲定点観測時の様子。お昼になると多くの人が来庁する。



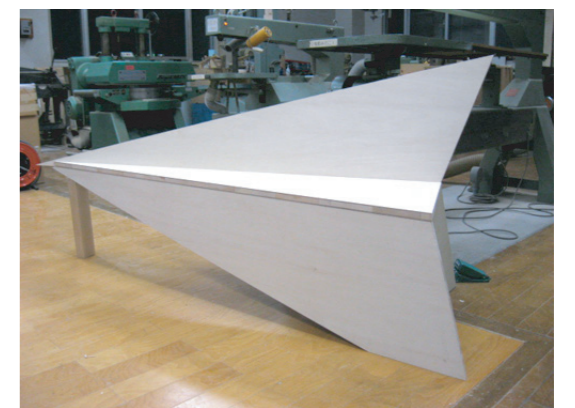
▲若松合同庁舎配置図



▲習作：猪苗代金曲バイパスウッドデッキのベンチ。二つの正方形の枠をずらし傾けて設置することで、座面、背もたれを作り出すデザインになっている。



▲合同庁舎プレゼンテーションの様子。身体障がい者の方を支える「明日を考える会」の皆さんにも協力を頂いた。



▲合同庁舎に提案したベンチ。サイン同様、紙飛行機を連想させるデザインになっている。